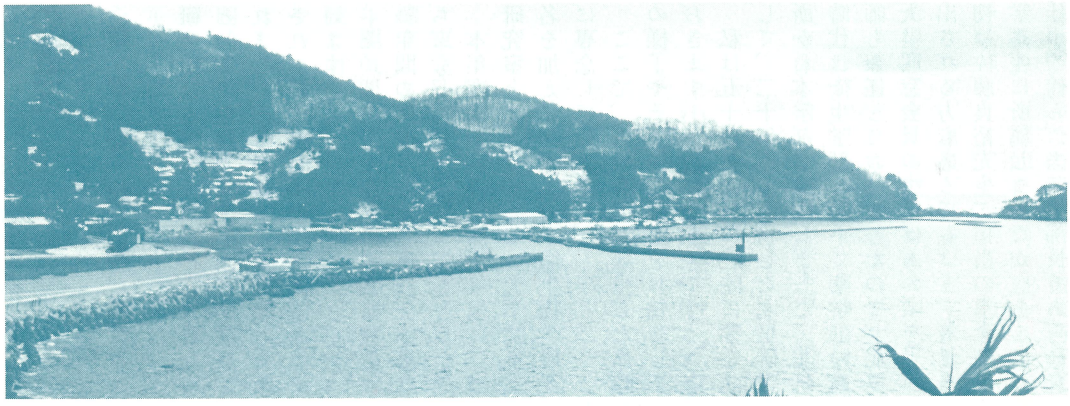
三水会会報

北里大学水産学部
同窓会会報
第　7　号

昭和59年3月14日発行
編集者　大野良樹
発　行　北里大学水産学部同窓会
（連絡先）
〒150　東京都渋谷区恵比寿3－39－2（長屋）
振替口座　第一勧業銀行大手町支店　008－1182388



「三水会の充実をめざして」

三水会理事　田中信介

みなさん、いかがお過ごしでしょうか？　話が少し古くなりますが、年末年始に全国高校駅伝、箱根大学駅伝をテレビで観戦して、こんなことを感じました。

優勝したのは、高校駅伝が兵庫県代表の報徳学園で、箱根駅伝はみなさんもご存知のように早稲田大学でありました。この2つの優勝したチームには共通点があったように感じられます。それは勝とうという意識が前面に表われない、そして淡々として試合に望んでいる姿であったように思えます。一方優勝候補と目されながら敗北した駅伝名門の世羅高校や、順天堂大学には、競いがあり力みが見られました。

何故三水会とは全く関係ないこんな話をしたかと思われるでしょうが、それは我々三水会の運営或いは仕事にも、こういった飄々とした気持がとても大切なのではないか、そう感じたからです。

ところで、本会も早いもので今年で4年になるわけです。会の運営も発足以来、皆様方の御協力により、順調に歩みを進めている次第であります。しかしその反面これからが、今までとは違った意味で会を充実させなければならない大切な時期であることを感じます。

会を惰性やマンネリ化させないためにも、新しい企画や催物等の必要性があるのかもしれません。そういった中で、日頃私が個人的に思っていることを話させていただきますと、小さなサークル活動や同じ職域の集まり、飲み会等何んでもよいと思いますが、こういった卒業生の集まりが活発に行なわれ、それが小さな軸となり人間の和を広げ、三水会と交流をもち、三水会をささえるひとつの力になったら、中味の濃いとてもすばらしい会になるのではないかと考えております。もうすでにこういった会の活動をされている方々も少なくないと思いますが、さらに今後の発展を望んでやみません。

そして、私も三水会の一役員として、より多くの方々が参加できる会を目指し、微力ながら協力していきたいと考えております。

水産微生物学研究室の近況

教授　野村節三

三水会々員の皆様には社会の各分野で、益々ご活躍のことと思います。

三陸は例年になく早く厳しい冬の到来を見て、今日も五葉山系から吹き下ろす寒風に、ときおり粉雪が舞い、凍てついた林道の路面は融ける間もありません。

さて、本学部第三回以降の卒業生の多くはご存知とは思いますが、当研究室は本学部では九番目の研究室として、昭和五十二年四月に開設されました。その後、年々設備も充実され、早くも七年が過ぎようとしています。

その間、五十四名の卒業研究生が一年間の研鑽を終えて実社会へ巣立ち、二名が修士課程へ進学しました。

本年度は十名の学部四年生に、当研究室としては初めての大学院生二名を加えて、十二名が微生物の研究に専念しています。

ここで、当研究室が誕生した当時の様子やその後の動向をお知せしておきます。

私は五十一年九月に三陸に夢を託して、二十年近く勤務した北里研究所から本学部へ赴任しました。北研時代は衛生学部に続いて薬学部の講師も兼任しておりましたので、北里大学同窓会員の中にはあの頃を思い出される方もあるでしょう。着任当初は佐藤良裕先生ご担当の水産衛生学講座に所属しましたが、そこでの仕事の傍ら、当時学部長であられた松浦文雄先生のご指導の下に、水産微生物学講座を新設するための準備を進め、翌年四月ようやく細菌関係の研究室開設に漕ぎつけることができました。また同時に北里研究所から長林俊彦先生を専任講師として迎え、水生動物ウイルスの研究施設の新設に向けてその準備が始まりました。

生れたばかりの研究室に第一回卒研生として集った太田保法君、近藤裕之君、佐藤敏行君、山科三郎君、それに吉村乗勝君とは不充分な設備の中でも細菌研究への意欲を燃やし文字通り手造りの苦労を共にしましたが、三陸沿岸や養魚場での試料採取、只見総合実習所での夏期実習とセミナー、田子倉湖でのモーターボート、はては採血用に飼育した羊の小屋造りや草刈り、今は恒例となったコンパなど皆なつかしい思い出の一こまです。

五十三年春にはウイルス研究施設も既に完成し、石黒信良君、酒井直樹君、野々村信一郎君、門間公夫君和田克之君の五名が所属して卒業研究のスタートを切りました。その後当研究室には増殖学科と食品学科の両学科から卒研生を受け入れることになり、五十五年七月に水産微生物学講座として正式に発足しました。

五十六年五月には研究室開設当初から、積極的に協力された斎藤博司助手が当講座のスタッフに加わり、微生物の研究と学生実験の推進に大きな力となっています。

現在、当研究室は細菌グループが第一校舎の一・二階に、ウイルスグループは図書館隣りの旧標本棟の一・二階にと分散して多少は不便ですが、繁用する共通機器や感染実験室が近く、研究上ではむしろ好都合です。昨年は懸案であった無菌室の第一校舎への移転が完了し、学科共通設備として有効に使用されています。

研究テーマは一貫して魚貝類の病原細菌とウイルスについて、前者は生化学的、後者は疫学的側面から追求しています。細菌グループでは主として、一、魚類せっそう病菌の溶血毒素　二、魚類カラムナリス病菌の形態と生理　三、同カラムナリス病菌のタンパク分解酵素　などについて、私と斉藤助手が分担し、これに大学院生の小原伸君と藤野正俊君も加わって研究が続行され、卒研生の指導に当っています。

一方、ウイルスグループでは、一、無脊椎動物からのウイルスの分離と分布　二、海産魚からのリンホシス

チス・ウイルスの分離、性状および分布　三、伝染性造血器壊死症（IHN）および同膵臓壊死症（IPN）ウイルスの予防　四、ウイルス性赤血球壊死症（VEN）ウイルスの分布　などについて、長林講師を中心に卒研生と精力的な研究が進められています。

長林講師は本学部での研究・教育の傍ら、岩手大学、岐阜大学および鳥取大学の各農学部獣医学科へ魚病学担当の非常勤講師として出張され多忙な毎日を送っておられます。

私は一昨年来より学生課も兼任していますので、北里会役員を始め、地元や企業関係者と接する機会も多く、その他の諸用にも追われているのが実状ですが、微力ながらその任を果たすべく頑張っています。お蔭様で、最近は大きな交通事故や事件もなく、今年度の就職状況も順調ですから、またこの春には晴れやかな卒業生の顔がキャンパスを満す日も近いと楽しみにしています。

最後に、当研究室の卒研生気質に触れておきます。研究室開設当初から数年間は何故か執行委員長を始め役員が続き、課外活動の指導的な活力が研究室に溶け込んだような独特の雰囲気がありました。これがきっかけとなったのか、その後は当研究室も各クラブ的な活動が盛んとなり野球、スキー、キャンプ、釣り、ボーリング、温泉、麻雀など年によって得意？とする種目があるようです。もっともどれも得意とする学生もいましたが。正に〝健全な精神は健全な身体に宿る〟です。「微生物の賜物」であるアルコールの火は絶やさず、燃えていることも付記しておきます。

新しい年が明けて、三陸にも小正月がやってきました。〝冬来たりなば春遠からじ〟

終りに、三水会の益々のご発展と会員諸兄のご健勝をお祈り致します。

小笠原海洋センターに勤務して

財団法人東京都海洋環境保全協会
小笠原海洋センター
研究員　島谷　正
（増殖学科一期生）

東京から南へ千km・沖縄とほぼ同緯度にあるここ小笠原諸島・父島は年間気温二十四度・海洋性亜熱帯気候の南海の孤島です。こんな父島へやって来たのは、今から七年前の事でした。当時定期船（週一回）で約四〇時間を経て初めて見た父島は、海の美しい事・南の島特有のコバルト・ブルーの海が広がっていたのを覚えています。今、私は小笠原海洋センターと言うウミガメの博物館に勤務しています。館内にウミガメに関する展示品や飼育水槽を備え、ウミガメだけの展示館です。と言っても従業員四名の小所帯（！）、まるで博物館のミニチャアの様なものです。しかしウミガメだけの展示館は恐らく日本中（いや世界中）でここだけでしょう。なぜ人口千五百人の小さな孤島に展示館（ナンテ）あるのでしょうか。小笠原諸島は北西部太平洋のアオウミガメにとってほぼ唯一の産卵場で、毎年五月から七月にかけて各海岸へ夜間、大きさ一m・体重百五十kg位アオウミガメが産卵の為に上陸して来ます。

この当地では、昔から住民とウミガメのつながりが深く、今では村のシンボルとなっているほどです。しかしながらこのアオウミガメも、世界的にその生息数が減少し、絶滅が心配される種の一つとなってしまいました。小笠原でも、明治初期には千頭以上のウミガメが捕獲されていましたが、今では百から百五〇頭前後と減少してしまいました。そこで我々小笠原海洋センターでは、展示業務と並行してアオウミガメの資源回復の為に、サケ同様、人工孵化・放流事業を行っています。

捕獲された親ガメを一時蓄養池に入れ、人工の砂浜を作り産卵させ、孵化場へ移し、孵化させています。毎年一万五千から二万五千粒を採卵・一万から二万頭の仔亀を放流しています。ウミガメは産卵・孵化とも夜間行なわれる為、五月から十月の間、我々が交代で、ワッチを組み、一晩中産卵・孵化場に待機して、採卵や孵化の面倒を見ています。

スタッフが男子三名なので、三日に一度の徹夜・しかも百五〇kgを越す相手との仕事は、若さを失いかけた体にはいささかコクになって来ました。又、ウミガメはサケ同様、生れ故郷に再びもどって来るとされて

いますが、生れた仔亀が成熟するまで十年とも十五年とも言れ、この先何十年も続けなければ明確な成果が現われないつらさがあります。こうした中でも孵化したての仔亀の可愛いらしさ・一年間飼育した亀の放流時の感激は何とも言えぬものがあります。

学生時代の三陸地方の北の海・そして南洋的な小笠原の海……余りに対称的ではありますが、生活環境は学生時代同様（イヤもっと悪いでしょうか）辺ぴな・イナカの生活です。昨年五月に通信衛星が上り、やっと電話もダイヤル直通・本年五月より衛星中継によるTV放映も始まる予定です。但し交通は五日に一度の定期船（二十八時間もかかります。）・のみで航空路が無く、まだまだ不便な生活が続きそうです。

我ながら学生時代をも含めよくこんな生活をしていると思いますが！But十年も都会に暮していないと、もはや社会復帰の見込みなし、とてもとても、満員電車で通勤なんて出来そうにありません。もうすっかり諦めています。

こんな小笠原へ来島の機会がありましたら、連絡して下さい。海中の美くしさは、ピカイチ・周りが海だらけの島ですから、ダイビング・ヨット等何でもOKです。又南洋果実（バナナ・パパイヤ等）は豊富で、旅行者には最高です。是非一度、小笠原へ来て下さい。お待しています。

「下宿の親父さんインタビュー」

崎浜の下宿を訪ねて、下宿の大屋さんに卒業生の思い出を語っていただきました。今回登場するのは、ニイセン商店の親父さんです。インタビュアーは病理学教室の厚田先生にお願いいたしました。

厚田――おばんです。

ニイセン――おばんです。

厚田――このアパートが建ってから何年経ちましたか。

ニイセン――十一年になっかな。顔のシワも増えたよ。

最初は八人入ったかな。女の子四人入れたんだけど、よくトイレがつまって大変だったなあ。一期生の日野君とミカちゃんは卒業後結婚して今じゃ子供ができたそうだ。山ちゃんと荒木さんもあのころから二人だったなあ。

厚田――ここはお店もやってるから色々な学生が来たでしょう。

ニイセン――開学当時はよく店の奥で学生と酒飲んで馬鹿話したもんだけど、あの頃の学生には強い印象が残ってる。今でもあの頃の学生が三陸に来ると、顔見ただけですぐ思い出すね。あの頃の学生は本当に素直な子が多かったけど、今の学生は自分本位で人に迷惑かけても気にしない子が多くなったような気がするねエ。部屋代も昔の学生は毎月キチンと払ってくれたけど、今では一年分以上滞納しているのがいるからねエ。

やっぱり印象に強く残っているのは三期生位までかな。その頃の学生では石川君、吉田君、三期生の星君戸叶君など、地元の連中ともつきあっているのがいたけど、今の学生にはそういうのはいないねエ。昔は色々な相談もちかけてくれる学生が多かったけど、今じゃそんなことほとんど無い。

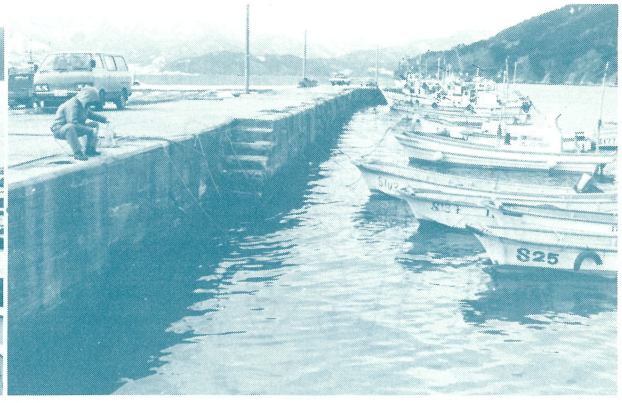
厚田――昔は大屋と店子的なところがあったけれど、今は単に金銭契約と割り切っている感じだね。ところで、アパートをやっていて、よかったと思いますか。

ニイセン――いい面としては、市場関係に就職している卒業生にはずいぶんお世話になっているし、大学の先生にも話をしやすいし、色々と指

導してもらえるからね。そういう点では大変な利益だ。それから、去年の夏に一期生の松崎君と、モコちゃん（旧姓高橋）夫妻が子供二人つれて訪ねてくれたときは、本当の息子、娘が訪ねて来た様な気がしたもんだ。そういう点では、やっぱりアパートやっていて良かったと思うねエ。

どうもありがとうございました。少し耳のいたいこともありましたが。卒業生の皆さん、大屋さんは皆さんのことをなつかしがっています。大屋さんには必ず年賀状を出しましょう。三陸へ行ったときには必ず大屋さんのところにも顔を出しましょう。きっといいことがあるんじゃないかな。

（この項、文責　大野良樹）



ゴルフコンペ「三陸メモリアル杯」始末記

増殖学科二期生　浅野　雄二郎

さる十一月三日（文化の日）、千葉県市原市、千葉セントラルゴルフクラブに於きまして、「三陸メモリアル杯」と銘うってゴルフコンペを開催いたしました。当日は十一月というのに汗ばむほどの天気にめぐまれ、出場者十二名は三組に別れ、フェアウェイで、グリーン上で、珍プレー名プレーを展開いたしました。この会は順位よりもまず親睦を第一にと企画いたしましたが、スコアの方は選手の皆様の仕事疲れがたたってかいま一つで、幹事であります私が低レベルながら第一回の栄誉ある優勝者に輝くことができました。競技にひきつづき表彰式ならびにパーティーが行なわれ、入賞者には三水会よりの楯、賞品が授与されました。またこの席上、次回の代表幹事として二回生の吉田映一君が全会一致で指名されました。この企画が今後二回・三回と行なわれます際には、卒業生のみなさまのふるってのご参加をお願い致します。

最後にこの誌上をおかりして、今回大変お力添えをいただきました二回生の田村治君、松島俊樹君、中津雅寛君にお礼を申し上げます。

◇　◇　◇

「残念、いも煮会雨天中止」

昨年十月九日（日）、秋川橋バーベキューランドで行なう予定でした「いも煮会」は、当日あいにく雨のため、中止となりました。前夜までは、何んとか天候はもっていたものの、朝起きて見るとザーザー降り。

材料の仕込みを担当していた長屋会長と電話連絡の末、午前八時半には中止を決定しました。幸いにも材料は、当日調達を予定していたため被害金額は最少限に抑えることができました。

中止を知らずに来られる方もあるかと考え、現地に最も近い（？）、私と田中理事と二人で一応行きました。

世の中物好きな人がいるもので、根性でバーベキューをしているグループが結構ありました。豪華なキャンピングカーで乗りつけている人、天幕を張っている人、ヤケになって雨の中で飛びまわっている人、様々でした。

肉のやける匂い、ヤキソバの焦げる匂い……。おいしそうな煙の中、待つこと三時間半。

結局二家族の方がお見えになりましたが、丁重にお引き取り頂きました。せっかく遠くまで来て頂いたのに申し訳ありませんでした。

今年こそは、何んとかリターンマッチをしたいと考えております。詳細が決まりましたら、この会報でご案内いたしますので、ぜひ皆様、ご参加下さい。（前出の二家族の方もこりずに、どうぞ。）

田村　治

「先生を囲む会」及び第5回三水会総会

開催のご案内

本会では、第5回三水会総会の開催にあわせて、「先生を囲む会」を下記のとうり開催いたします。水産学部の先生方においでいただき、水産学部における最近の話題などについてお話をしていただきます。

あわせて懇親会も行ないますのでおさそい合せのうえ、是非、ご参加ください。

1、期日　昭和59年5月13日（日）
　11時～12時　総会
　13時～15時　先生を囲む会
　15時～17時　懇親会

2、場所　北里本館（白金校舎内）
　大会議室

編集後記

きびしかった冬もようやく遠のき春の気配が忍び足でやってまいりましたが、皆様いかがおすごしでしょうか。今年の冬は首都圏でも大雪が降り、三陸できたえた雪上運転術や雪上歩行術をぞんぶんに発揮することができました。こんなところにも三陸での生活が身にしみとおっているのですね。三陸での雪の中の生活を思うにつけ、今も雪国で暮している友人を思い、苦労しているだろうなと、しみじみと感じる今日この頃です。